

## 『ひみつの王国：評伝石井桃子』

尾崎真理子著／新潮社

ブックガイドの原稿を書くのはこれで3回目です。毎回、どんな本をとりあげるか悩みます。過去2回は自分自身がおもしろいと思い、なおかつ大学生のみなさんに読んでもらいたい、もしくは興味を持ってもらえるのではと思った小説や随筆を選びました。今回も、初めは大学生が主人公の小説について書いていました。北村薫の『空飛ぶ馬』『夜の蟬』『秋の花』（いずれも東京創元社）などの初期の作品です。これらもおもしろいので、是非読んでみてください。しかし、その原稿を書いている途中にこの本を読んだら、こちらを薦めたくくなりました。でも評伝はその人を既に知っている読者にとって興味深いものです。長岡技大生に向けてのブックガイドに載せてもいいのかしら。そんな迷いも石井桃子の作品を再読してゆくうちに消えていきました。石井桃子の翻訳や小説も一緒に薦めてしまえばいい。というわけで、これから少しの間、私の好きなものにお付き合いください。

石井桃子は明治40年（1907）に浦和に生まれ、平成20年（2008）に101歳で亡くなりました。絵本『ピーターラビットのおはなし』（福音館書店）の翻訳者、また戦後ベストセラーになった『ノンちゃん雲に乗る』（岩波書店：石井桃子集1）の作者といえ、思い当たる方も多いかもかもしれません。今回この評伝を読み、日本女子大学で英文学を学んだ後に菊池寛の下で文藝春秋社の編集の仕事に就いた頃や山本有三や吉野源三郎と新潮社で働いていた戦前の時代のこと、終戦直前から戦後にかけて宮城県で農業をおこなっていたことなど、これまで作品から垣間見えていた石井桃子の生涯がくっきりと浮かび上がってきました。

なかでも「クマのプー」と石井の出会いは鮮やかです。石井は菊池の紹介で犬養毅の漢書を整理するために犬養家に通っていました。昭和8年（1933）クリスマス・イブの夜、犬養毅の孫の康彦に贈られた洋書“The house at Pooh corner”を手にとった石井は翻訳して康彦とその姉の道子に語りはじめました。すると姉弟はストーブの前できゃあきゃあと笑いころげまわり大騒ぎとなります。

プーの話をも切望していたのは子どもだけではありませんでした。結核で亡くなった親友、小里文子も見舞いのたびに石井が話してくれるのを心待ちにしていました。文子との交流は石井の小説『幻の朱い実』（岩波書店）に詳しく描かれています。

戦後になると石井は岩波書店の編集者となり「岩波少年文庫」を創刊し、続い

---

て「岩波の子どもの本」という絵本を出版します。その後の海外留学を経て、翻訳、創作、児童文学の研究、家庭文庫つくりと広範囲に活動してゆきます。

このように、この評伝には明治から平成までの百年間、一人の女性の真摯に生きてきた道が描かれているのです。

<大人になってからのあなたを支えるのは、子ども時代のあなたです>これは石井がよく語っていた言葉だそうです。確かに、石井桃子という人がいなければ、私の世界は今とは違うものになっていた、と思います。子どもの頃、くりかえしくりかえし石井桃子訳の絵本や童話や石井が創刊した岩波少年文庫を読みました。大人になってからも自分の子どもに読み聞かせました。それらが私の中にしみ込み、今の私や私の家族を形成していると思うのです。

これまで読んできた本の中でも、多くの人が石井桃子や岩波少年文庫について言及していました。映画監督の宮崎駿は『本へのとびら』（岩波新書）で岩波少年文庫と石井桃子について熱く語っています。江國香織は洋梨やさやえんどうを食べるたびに石井桃子訳の絵本の文章を口ずさむと『絵本を抱えて部屋のすみへ』（新潮社）で述べていますし、恩田陸も岩波少年文庫を愛読していたことをエッセイ『小説以外』（新潮社）に書いています。北村薫の小説『リセット』（新潮社）には、まるで石井桃子のような人が登場します。生物学者、福岡伸一の『せいめいのはなし』（新潮社）の奥付には「献辞 パートンの黄色い本に」と記されています。これはパートン作、石井桃子訳の『せいめいのれきし』（岩波書店）のことです。石井桃子の百年は豊かな地下の水脈となり、多くの人々を潤しているようです。

学生のみなさん、将来子どもが生まれて本を読んであげたいな、と思った時、数多く出版されている児童書の前で、どれがいいかと迷うかもしれません。でも大丈夫。「石井桃子」の名前が入っている本なら絶対におもしろいです。間違いありません。

---

## 執筆者紹介

### 安原 明子

本学学術情報課学術情報係長。担当事務は図書館資料の経理等。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ひみつの王国：評伝石井桃子』尾崎真理子著 新潮社 2014年 2,916円

『空飛ぶ馬』北村薫著 東京創元社（創元推理文庫）1994年 734円

『夜の蟬』北村薫著 東京創元社（創元推理文庫）1996年 626円

『秋の花』北村薫著 東京創元社（創元推理文庫）1997年 670円

『ピーターラビットのおはなし 新装版』Beatrix Potter著 石井桃子訳 福音館書店（ピーターラビットの絵本1）2002年 756円

『石井桃子集1ーノンちゃん雲に乗る』石井桃子著 岩波書店 1998年 3,132円

『The house at Pooh corner』A.A.Milne著 Puffin Books 1992年 890円

『幻の朱い実 上・下』石井桃子著 岩波書店（岩波現代文庫）2015年 1,318-1,512円

『本へのとびら』宮崎駿著 岩波書店（岩波新書）2011年 1,080円

『絵本を抱えて部屋のすみへ』江國香織著 新潮社（新潮文庫）2000年 767円

『小説以外』恩田陸著 新潮社 2005年 品切

『リセット』北村薫著 新潮社（新潮文庫）2003年 680円

『せいめいのはなし』福岡伸一著 新潮社 2012年 1,512円

『せいめいのれきし』Virginia L. Burton著 石井桃子訳 岩波書店 1964年 1,728円

ブックガイド目次へ